世界盲人福祉協議会の最近の動向

社会福祉法人日本ライトハウス
理事長　岩　橋　英　行

目　　次

1．世界盲人福祉協議会と私 —— 25年を顧みて ——
2．世界盲人福祉協議会と世界盲人連盟
(1) 合同への歩み
(2) 調印文
(3) バドベルレブルグにひろう
(4) 新たな挑戦
3．第6回世界盲人福祉協議会総会より —— アントワープにて ——
(1) 開発途上国の課題
(2) 盲人の行動訓練
(3) 盲人のスポーツ
(4) 盲婦人問題
(5) 失明防止
(6) 盲に対する情報サービス
(7) 観光と会議場にひろう
(8) 今日への直視と未来への課題
4．主なるスピーチ
(1) 世界盲人福祉協議会と世界盲人連盟の対話について
……世盲協会長ボリス・ジミン
(2) 援助資源の活用……西ドイツ・クリストフェル・ブリンデンミッション
ウォルフガングスタイン
(3) アジア委員会報告……アジア委員会委員長フレッシュ・アフジャ
(4) 世界の盲人口減少における研究の大きな可能性
……ナショナル アイ インスティテュート所長　カール・クッフェル
(5) はなし言葉を通しての情報（ラジオ、テレビその他の情報機関を通しての盲と社会のかかわり)……世盲協副会長　岩橋英行

1．世界盲人福祉協議会と私　――25年を顧みて――

視覚障害者（以下、視障者と略す）に関わる包括的な思想の流れは、今日に至るまで、時には時代の波に流され、または時代を先取りしながら様々な変遷を辿ってきました。しかし特に第二次世界大戦後、これらの流れを国際的な立場で集約し、世界的な視野の下で指導体制や協力関係の整備が急務となり、世界盲人福祉協議会(World Council for the Welfare of the Blind以下、世盲協またはＷＣＷＢと略す）が組織されました。世盲協は、世界全地域で視障者及びその援護機関との協議により、盲人福祉にかかわる全ての事業、諸問題に言及する事を目的としていますが、本来的な狙いは、個々の視障者及びその援護機関を代表し、世盲協という名において、各国政府に盲人福祉の見通しや国家的な規模で取りくむべき課題を認識させ、その国における視障者の地位の向上や文化的な営みを高揚させるものなのです。

世盲協の総会は５年に１回づつ開催され、役員会は毎年１～２回、実行委員会は２年～２年半に１回開かれる事になっています。第１回総会は1954年(昭和29年)パリに開かれました。それ以後ローマ、ニューヨーク、ニューデリー、サンパウロを経てアントワープへと引き継がれました。私は第１回総会以来、第２回のローマ会議を除いて全ての総会に出席致しましたが、この25年を振り返る時、感無量なるものがあります。昭和29年と言えば、私がちょうど29才になった年であり、昭和20年８月の敗戦から数えてまだ復興年浅い時代でありました。その当時の日本はと言えば、やっと防空壕の穴ぐら生活から地上のバラックに住居をかえ、食べものも配給制度から自由に口に入るようになり、交通機関も石炭荷車や屋根の上に乗って旅行していた時代から自由に切符が買え、自分の望む指定席に座れるようになった時であります。とは言え、日本の国力、国際的信用度はと言えば、まさに４流から５流位の程度で、各国からは“12才の子供”と呼ばれていました。更に片身のせまい思いをしたものには、日本人は常に戦争責任者、軍国主義者と呼ばれた事であります。鳥居篤治郎先生の手引きをして羽田空港からエール・フランスに乗ったのですが、空港には40～50cmもする草が一面に生い茂り、滑走路も米軍によってやっと舗装されたという状態にあり、待合室も米軍使用のかまぼこ型組み立て兵舎をあてていました。勿論ジェット機とてなく四発のプロペラ機であり、羽田からパリまでは実に64～65時間もかかった事を記憶しています。途中ガソリンの補給のためマニラ、サイゴン、バンコック、カルカッタ、カラチ、バグダッド、ダマス、ローマを経てパリに着きました。最初の寄港地マニラに寄りますと、日本人の私達だけが別な待合

室に入れられました。戦争中バターン半島の死の行進により、大虐殺をした日本軍に対する怨みが強く、反日感情は頂点に達し、日本人と見るとどのような暴力が与えられるかわからないので、保護のために別室に通されたそうです。部屋に行く途中、金網ごしに現地人達がジャップ！ジャップ！と口々に叫び口笛をならし、足で大地を蹴っている姿をいまだに忘れる事は出来ません。途中多くの空港で1～2時間づつ休憩しましたが、その度に持ち物・金・職業等に対するこまかい書類が必要であり、くどくどと渡航目的を警察官の前で説明しなければならなかった事も思い出の1つであります。

パリの総会はユネスコハウスで行われましたが、焼野原とバラックの日本からやって来た私にとっては、シャンデリアの輝く国際会議場は、まさに夢の殿堂でありました。この総会において先ず取り上げられた事は、「ゆりかごから墓場まで」の福祉の頂点を目指して、各国が法的援護基盤を作り、教育・福祉への国家社会の義務づけを自覚する事から始まりました。その当時、先進諸国にあっては盲の定義が確立されてはいましたが、殆どの国が盲の定義もなく、義務教育を行なっている国も数少いものでした。更に伝染病・栄養失調等により失明者の増加は数限りなく、失明防止への処置も国際的には何らの方法、手段もとられていないというのが実状でありました。因みに、この総会において決議された事項をひろってみますと、①盲の定義　②全盲優先　③失明防止対策　④盲教育の普及および宣伝　⑤癩盲の救済　⑥世界的連絡の緊密化　⑦経済的援助の要請　⑧盲人に対する社会保障制度確立　⑨世界点字審議会であり、特にこの中でハンセン氏病（癩病―決議⑤）の恐るべき蔓延とそれに伴う癩盲の救済は、参加者の心を震撼させたものでありました。現在ハンセン氏病は完全治癒が出来、癩盲救済という言葉は全く聞かれなくなりました。そして今1つは、全盲への特別措置と社会保障の確立（決議②、⑧）であり、如何なる方法を講じても、盲人に人間らしい衣食住を与え、とにかく食べて行けるようにする事が先決であるという切実な訴えでありました。年若くして最初の国際会議に出席した私にとって、そうした事どもは全て当時の日本にとっては他国以上に必要であり、各国代表が熱っぽく発言する言葉は、とうてい到達出来得ないはるか彼方の遠き夢の中の出来事のようにさえ思われました。英国へ渡り、英国王立盲人援護協会（主にイギリス国内の盲人を援護する協会；Royal National Institute for the Blind, 以下RNIBと略す）、英国王立連邦盲人援護協会（主にイギリス国外の盲人を援護する協会；Royal Commonwealth Society for the Blind, 以下RCSBと略す）、エディンバラを訪問するにつけ、当時の日本と比較してあまりの格差のあ

るのに目を見張ったものでありました。その１つは盲のために支払われている国・地方公共団体・民間団体よりの財政支出の相違、次いでリハビリテーションの専門職員・指導員の質と数の相違、機械化された盲人用具、一般企業・社会への進出のための組織だった準備とその職種の多様性の相違、そして最後には盲人を取り巻く一般社会人の盲に対する理解と、盲人自身のもつ自覚と教養の深さでありました。国際会議に一度出られた方は誰れもが痛感されると思いますが、国力のある国・実力のある人・尊敬を集めている団体等には、休憩の時間であれ食事の時であれ話題と社交の中心となり、人々は知らず知らずにそのまわりに集まってまいります。しかし我々日本人とドイツ人はやはり片身のせまい思いをしなければなりませんでした。参加者達はあの忌わしい戦争や政治という事を、この会議に極力持ち込まないよう配慮してくれ、我々に常にやさしい言葉をかけてはくれましたが、自分の兄弟・親類・また自分自身が、日本軍によって大きなダメージを受けたという話を耳にしますと、いささか身のすくむ思いが致しました。恐らくこうした事は、戦後の若い方々にはなかなかご理解頂けないだろうとは思いますが、今日の日本を見る時、かつて敗戦という逆境の中にあえいでいた日本、そして敗戦ゆえに全て一からやり直さねばならなかった日本が、盲人の世界というこの小さな一部門においても、当時の世界からどの様に見られ、いかなるレベルにあったかを知って頂きたいと思います。

1959年ローマにおいて第２回総会が開かれました。その時の決議の主なものは、①雇用を目的とする盲人の更生と訓練　②保護条件による盲人雇用　③農村雇用　④工業・商業・専門職に対する盲人の雇用でありました。

1964年第３回総会がニューヨークの国連本部において開催されました。日本の国力も信用も暫時高まり、我が国への怨みもうすれ、日本からは付添いを入れて実に16名の人々が参加しました。この総会は、盲教育・福祉・職業の面において、既成の哲学が盲人を同情と憐憫・援護の対象としていたのとは違って、まさに 180度の転換を致しました。「ゆりかごから墓場まで」といった英国の福祉・教育の最高理念が、英国人自らの手によって引き降ろされ、盲という障害を教育・福祉の原点とするよりも、むしろ、人間性にその基盤を求め、人間としてどうあらねばならないかの追求こそが、教育・福祉の真髄であると結論づけられました。よって教育・福祉の課題は、盲という障害を他の方法においてどのようにカバーし、可能なかぎり除去する事が出来るかという事こそが必要であって、盲なるが故にという理由でもって教育・福祉・職業を考察するのではなく、個々の盲人の持つ能力とニードにあった個人対象の教育カリキュラムや訓練方法こそが大切であり、一律化された制度や

法律は、総括的価値は有しても、真の個の完成にはなり得ないという哲学が樹立されました。盲なるが故にどの様な職業を、盲教育はいかにあるべきか、盲人救済の法律はどのように制定すべきか、といった視力障害という障害にのみ注目することを、信条としていた人々にとっては、まさに青天の霹靂でありました。盲人は庇護され援護される対象である次元から、有能なる社会の一員として、個の存在を意識し、そこに生存の価値と意義を自覚する事への志向は、人間の尊厳性に何と素晴らしい栄光の座を与えた事でありましょう。この会議こそ世盲協の歴史の中で、未来にわたり永久に記録される総会であったと今なお語り継がれています。この時の決議は次のようになっています。①アジア計画　②ラテンアメリカ計画　③アフリカ計画　④農村盲人問題　⑤失明防止問題　⑥盲人の一般社会への融合　⑦老齢盲人問題　⑧重複障害盲人問題　⑨雇用の機会　⑩盲人補装具の展示　⑪スペイン語の使用　⑫世界盲人福祉週間　⑬点字表記法　⑭交流計画　⑮ライオンズならびにその他の民間クラブへの伝達　⑯盲人団体問題　⑰財政援助問題　⑱盲ろう者援護事業への指針　⑲盲ろう重複障害事業に対する法皇援助　⑳身体障害者の権利宣言。

世に言われる人間宣言と共に、特に注目しなければならない事は、全地球的視野において、各々の地区（決議①、②、③）に対し、適切な必要と思われる指導がなされた事、次に社会への融合という課題（決議⑥）で、現在、教育、職業面で盛んに話題にのぼるインテグレイト・システム（社会への統合）、新らしいリハビリテーションの基盤がここに芽生えた事。次いで重複障害盲と盲老人対策への対応（決議⑦、⑧）が叫ばれた事、そして世界盲人福祉週間と身体障害者の権利（決議⑫、⑳）が世盲協という名において高々と掲げられ、それが国連に伝達される事によって、1981年の国際身体障害者年を実現する一粒の芥子種が力強く撒かれた事、そして最後にアントワープに延々と引き継がれて来た盲人団体との協力問題（決議⑯）が、始めてここに登場して来た事も忘れてはならない事項であります。こうした事項を持ち帰った時、日本の国内にはけんけんがくがくの議論が巻き起こりました。盲人に対しより強力な援助と助成をという立場の人々にとっては、この人間宣言は10年早い道標であり、盲人の可能性を充分発揮したいという人々にとっては、やっと春が来たという思いであった事でありましょう。日本でさえそうした状態であるのですから、既に日本との間に相当な水のひらきが出来ていた当時のアジアやラテンアメリカ地区にとっては、まさに途方もないやっかいな宝物が舞い込んで来たといった感じであったに違いありません。盲人は無能であるが故に、憐憫・同情の対象として扱い、法制化を促していた国々にとっては、一足飛びに“盲人は可能性を秘めた有

能なる社会人になり得る”というこの二律背反の課題を、どれ程器用に一般社会に説明しなければならなかったであろうか、その狼狽ぶりは充分想像する事が出来ます。

1969年には初めてアジアの地に世界の人々が集まりました。ニューデリーの第4回総会がそれであります。この時の決議の主なものを拾ってみますと次のようになります。①（世界盲人人口数の増加率と治療対策、盲児教育の組織化促進、盲人の社会復帰など）現代盲人の直面する諸問題を社会に訴える。　②技術の革新と盲人用具の開発　③失明防止と開眼治療。この中で③の失明防止は過去3回の総会のように単なる決議ではなく、具体的な形で各国への指名という方法でその実現がたが取り上げられました。開催場所がアジアであり、しかも世界盲人総人口の3分の2を有するこの地区における失明防止は、緊急中の緊急事としてそのイニシャティヴと対策を日本に要請されたのであります。日本の工業力はこの時日増しに増大し、アジア各地においてはその行き過ぎたやり方にエコノミック・アニマルという有難くない名前を与えられ出したのも、この時代でありました。世界の、アジアの関心が日本に寄せられようとしたのもこの頃である事を思う時、これまでの日本の努力と未来への課題が、今一度日本人という原点にかえって、真剣に世界観的視野から考え直さねばならないと自覚させられたものでありました。相撲のランクで言えば、世界の人々は日本に対して前頭筆頭か小結あたりの評価をしていたのではないかと考えます。そして今一つは、技術の革新と盲人用具の開発（決議②）であります。既にニューヨーク総会以後、盲教育・福祉関係者と科学者・心理学者の提携は除々に始まっていました。スウェーデンのウプサラ大学、ソ連のモスクワ大学や視覚欠陥学研究所、西ドイツのハイデルベルグ大学、フランスのソルボンヌ大学、アメリカのハーバード大学、ウェスタンミシガン大学、マサチューセッツ工科大学、スタンフォード大学、等々においても、模索の中に超音波を利用したメガネやレーザーを用いた杖、電子工学を利用した墨字読み取り機、そのほか盲人の行動や情報処理についての科学的方法、心理学的見地から見た訓練や教育方法、等が時を同じくして研究開発されていましたが、やがてそれはオプタコン（Optacon）、ソニックガイド（Sonicguide）、モワットセンサー（Mowat Sensor）、レーザーケーン（Laser Cane）点字製版のコンピューター導入等々をこの世に送り出す強力な基盤となりました。更に人口衛星の宇宙訓練士養成中、暗黒の中での操作実験の成果は、逆に盲教育・福祉へ大きな果実をもたらしましたし、今盛んに言われる視覚欠陥学（Visual Defectology）の必要性も、この決議以降真剣に取り上げられた事を忘れてはなりません。私は、日本において失明防止の重要性を痛感しました。ささやかながらアジ

ア眼科医療協力会（3､(5)失明防止の項参照）をこの２年後1971年に誕生させたのもこの決議ゆえであります。

第５回総会は、1974年ブラジルのサンパウロにおいて開かれました。第４回までの総会や各種国際会議は全て北半球において開かれていたのでありますが、始めて南半球にその場所を移した事は、この地域の人々にとっては画期的な出来事であり、特にラテンアメリカの盲人達にとっては大きな喜こびでありました。その為に南アメリカ大陸の盲人ならびに盲人関係者達は、その成功のために全精力を投入し、各国政府もあわてて各種の法律制定に着手致しました。総会開催を足がかりにして急速かつ総力をあげて整備された地域は、恐らくここをおいて他にないと言われています。ある人は20年の歩みを１年で成し遂げたとさえ言っています。この会議の主な決議をひろってみますと、次のようになります。①失明予防　②雇用　③開発途上国援助　④年金　⑤研究の利用　⑥ルイ・ブライユ記念年　⑦社会資源の活用　⑧盲聾対策　⑨他の障害者グループとの相互関係　⑩書面によるコミュニケーションへの機会　⑪点字の標準化　⑫歩行　⑬弱視　⑭リクレーション活動。この中で特に注目すべき事は失明予防（決議①）であります。国際眼科学会もこれまで独自の立場で失明防止に大きな努力をはらってまいりましたが、この総会を契機にして、本会期中に世盲協の失明防止委員会と国際眼科学会が１つになって世界失明予防協会（International Agency for the Prevention of Blindness, 以下IAPBと略す）が結成されました。更に今１つは他の障害者グループとの相互関係（決議⑨）の中で、1964年以来くすぶり続けて来た世界盲人連盟(以下世盲連またはＩＦＢと略す)との関係が具体的に総会の席上で提出され、公式の場ではなばなしい意見の交換と考え方の相違を戦わした事であります。臭いものにはフタをせよとのたとえ通り、これまで黙殺、または意識して避けて通った世盲連との関係が、これではいけないという事で1979年の総会に向かい、何とか協力の糸口を見い出そうと、まがりなりにもそれへの志向が両団体共に一致したという事は、歴史的にも意義あるものでありました。今１つは、リクレーション（決議⑭）が初めて議題の中に登場した事であり、有能なる社会人として活動するためには、一般の人々とリクレーションを通して交歓する事こそ必要であり、社会へ入るパスポートであるとさえ強調されました。やがてそれは1977年リヤドの実行委員会において、スポーツ委員会が生まれ、国際身体障害者スポーツ協会(International Sports Organization for the Disabled, 以下ISODと略す）と協力する基盤がここに誕生しました。

1979年アントワープでの第６回総会に出席して、私は日本への期待・尊敬が、こ

れほどまでに大きくまた浸透しているかを体験し、感無量なるものがありました。また一面、第1回総会から25年を経た今日、「はるけくもきつるものかな」と回想せずにはおれませんでした。感傷的だと言われるかもしれませんが、あの第1回パリ総会で片隅の椅子に小さくなって座り、人々の顔色を窺いながら恐る恐る発言した事どもが走馬燈のごとく甦っては消えて行きました。昨年5月、世盲協役員諸兄氏が大阪にまいりました。彼等が来日までに想像していた日本と、現実に目のあたりに見たそれとの間には、非常に大きな違いがあったようです。先ず新幹線、梅田の地下街の豪華さ、地下における人工の滝、夜の夜中でも婦人が1人で歩ける治安の良さ、ゴミひとつないプラットホーム、喉から手の出そうな各種各様の電気製品とカメラ、こうした近代化の日本の中に完全に保存された歴史の遺産、古代文明と近代文明を何らの不自然さもなく調和させている日本人の知性の高さ、等々は会う度に感嘆の声となって私に返ってきました。更に盲関係で言えば、世界一流と言われたパーキンス盲学校にも優るとも劣らない大阪府立盲学校の設備や教科内容、未だ見た事もないという身体障害者スポーツセンター、大関酒造株に働く全盲のコンピューター・プログラマー、100～200トンのプレスを操作する全盲の工員、規模こそ小さいが質的には高水準をいく日本ライトハウスの感覚訓練（盲人用ではない普通の卓球競技を見て）、歩行訓練、生活訓練があり、更に法的面から言えば身体障害者雇用促進法が既に制定されている事、しかも雇用していない企業が150億円近い納付金を納めている事実、教育福祉面・税政面にて完璧と思われるまでに整えられた法律の整備、プラットホーム・学校・施設・主要なる道路に敷きつめられた点字ブロックや音響信号機等々は、まさに彼等をしてよくぞ短期間にここまでという驚きと尊敬の念をもって日本を眺めさせずにおきませんでした。更に彼等が最も問題中の問題としていた事は、大阪にあっては盲学校長・盲人団体長・施設長が大阪盲人問題懇話会を作り、月に1回相互の連絡会議をもっている事であり、日本盲人福祉委員会が盲人団体・盲学校・施設によって組織され、更にそこに企業や政府が加わっているという事実は、世盲連との関係で頭を痛めている人々にとっては、まさに夢であり理想郷であったに違いありません。そして大阪府盲人福祉センターにおいて行われた国際交流会にあっては、盲学校・ＰＴＡ・盲人団体・施設・役所の関係者達が一堂に会し和気あいあいの協力と和やかさの中に、なおかつ未来に向かっての探求心と信念をもって進もうとしている姿は、望ましい盲関係のあるべき姿としてとらえた事でありましょう。人の口は電波よりも早いのでありましょうか。口から口へ手紙によって伝えられた幻の国日本、ワンダフル日本、という形で第6回総会

に過去のイメージを一新して登場したのであります。

開会式において祝辞が述べられました。国連事務総長、国連諸機関よりの後、サウジアラビア王の祝辞が代読され、英国、その他主要国からのものが読み上げられましたが、一向に日本の厚生大臣からの祝電が披露されません。どうした事かと思っていると、午後の会議の最中、事務局長の方から「インポータント・メッセージが入っているので皆様静粛にされたい。今、日本の厚生大臣から祝電が届きました」と前置きして、橋本厚生大臣からの祝電が読み上げられました時、万雷の拍手が起こりました。多数のメッセージの中で読み上げられるよりは、より効果的であり印象的でありました。更に科学者との提携、高度な技術水準の討議の中で紹介されたのは、アメリカ・ソ連に次いで日本の大阪大学方式でありました。また失明防止の項においては、日本船舶振興会、笹川記念保健協力財団からの20万ドルの寄付がＷＨＯになされ、それが呼び水となってＷＨＯが失明防止を今後の４大事業の１つに取入れるようになったという事も、感銘を与えた１つであります。更に会費値上げのところで、今迄世盲協は代表会員１人に対し 150ドルを徴収していましたが、すったもんだの討論のあげく１人 250ドルに値上げが決定した瞬間、議長は特に発言を求め「米・ソ・日・西ドイツは規定の代表会員数（日本は６名）以上、または倍数の会費を開発途上国に代わり納入されたい」と申し出ました。第５回アジア会議(1978年　於香港)の時にも日本代表団は感じたのですが、とくとくとして日本の現況を知らせるよりも、慎ましやかに各国の情況を聞き、求められればそれに応えるという態度が必要だと話し合いましたが、ここ世界の総会においても、同じ事が言えるのであって、かつて第３回ニューヨーク総会時代には、日本の現況を各国に有弁に知らせる事が、代表団の仕事の１つであり、発言する事によって誇りを持った過去の時代に、もはやさよならを告げねばならない次元に来た事を感じました。そしてアジア会議の最後の日、本間校長(大阪府立盲学校長)、樋口会長（大阪府盲人福祉協会長）と話し合った事（日本には按摩、鍼、灸があり、盲人が人に頼る事なく自立出来るという事実は、どの国にもまして貴重な宝である。）を今一度深く味わい、これを基盤にして、他の職種への開拓を、より積極的に行う事こそ、今後の日本の進むべき目標ではないかと再確認した次第であります。

2．世界盲人福祉協議会と世界盲人連盟

(1) 合同への歩み

本年２月26日より３月１日まで、世盲協と世盲連の合同役員会が、西ドイツのバドベルレブルグにて開催されるとの通知を受け、さっそく地図でその場所を探しましたが、一向に見当たりません。交通公社に開いてもはっきりせず、やむなく西ドイツ大使館に尋ねたところ、フランクフルトから自動車で３時間程のところにある事がわかりました。今年の日本は暖冬で案外しのぎやすい冬でありましたが、２月末通訳をかって出ていただいたフサコ・アラードさんと共に、フランクフルト空港に到着しました。予定ではここで一泊し、翌日目的地に向かう事にしていたのですが、偶然にも空港でノウィル夫妻にバッタリと出会いました。ゾンターク夫人が自動車で迎えに来ているから一緒に行こうというのです。自動車に乗って走り出しました。ベンツの大型車ではありますが、たくさんのスーツケースがあるものですから、私の膝の上にもどっかりその１つが鎮座まし、私の足元にはゾンターク夫人の可愛いペットのスコッチテリヤが寝ているという始末で、足を動かす事も出来ず、２時間半じっとガマンの子でありました。約１時間程で高速道路の両脇に雪が積もるのが見え始め、その積雪量は時間を追う毎に大きくなり、かき集められた雪が２m近く、ちょうど川の底を走っているようです。両脇は樅の木で、その上に雪が積もり、何百本、何千本ともしれないクリスマス・ツリーが立てられているようです。時たま若いカップルがスキーを担いで道を横切ります。やっとの思いでバドベルレブルグに着きました。街というより、鄙びた農村という方が適切かもしれません。ここに失明軍人専用の保養所があります。ここの施設長ゾンターク博士は、西ドイツ失明軍人協会会長で、本年８月以降はパキスタンのシャー博士の後を受けて、世界盲人連盟の会長になった方です。第２次世界大戦で失明し、片腕は義手です。この保養所にはベッドが百数十台入り、温水プール、体育館、遊技場、食堂、バー、盲人用具展示室、会議場、研究室、等々が完備され、日本の一流ホテル並みの設備が整っています。話しによると、こうした保養所は西ドイツに５、６ヶ所あり、失明軍人であれば無料、または家族同伴の場合は低額にて宿泊出来るといいます。一般の盲人でもゾンターク博士の許可があれば、失明軍人と同様の優遇が受けられるという事です。到着した日は、失明軍人のために講習会が開かれていました。晩餐会にノウィルご夫妻共々私達も招待されましたが、その席上、バドベルレブルグの市長さんが「この市に始めて日本人をお招きしました。我々はかつて日露戦争にお

いて、東郷元帥の率いる日本の連合艦隊がロジェント・ウェンスキィ中将の率いるロシアのバルチック艦隊を対馬海峡に敗った、あの大戦果を忘れがちであります。かつて日本とドイツは友好国でありました。しかし今や、その敗戦国ドイツと日本は経済大国となり、東と西で世界の大国として存在している事は感無量であります。」と歓迎の挨拶をしてくれましたが、いささか時代がかったこの挨拶には、どう反応してよいのかとまどった次第です。

1964年、第3回世盲協総会がニューヨーク国連本部において開かれました。この時、アメリカの盲目の国際法律学者ティンブロック博士によって、世界盲人連盟(The International Federation of the Blind以下世盲連またはIFBという）が誕生しました。その趣旨と目的は、いささか過激的にして極端ではありましたが、要約致しますと「盲人のことは盲人でしかわからず、常に盲人は世の中から次元低いものとして扱われ、その能力も無視されて来た。晴眼者達は、時には盲人に関心を寄せてはくれるが、その多くは盲人を利用して、自己の売名と立身栄達のための手段として扱う事が、あまりにも多くありすぎた。こうした忌わしい社会の制約と醜い晴眼者の束縛から離れ、盲人の手による教育・福祉を勝ち取らねばならない。その為には、盲人の人間性を主張し、数限りない差別の撤廃を要求する」といったようなものでありました。その後、この団体は急速な発展を遂げ、事ごとに世盲協と意見の食い違いや摩擦を起こして来ました。というのも世盲協の中には、晴眼者の役人、教育者、宗教家、社会事業家、盲に関心を持つ企業家、ライオンズ・ロータリーのメンバー、眼科医、等々が入っており、更には盲人団体の長も加盟しているにもかかわらず、理由は色々あったにせよ、端的に言って晴眼者がそのメンバーの半数以上を占めているという理由によって、事ごとに不協和音が生まれました。これではいけないという事で、1974年、ブラジルの第5回世盲協総会において、何とか歩み寄り、出来得れば一本化しようという決議がなされました。このあと毎年のごとく相集まり、両方の役員達は一本化のために努力をし、時にはヘルシンキにおいて合同役員会を持ち(1976年)、リヤドにおいては合同の実行委員会も持ちました(1977年)。そうした積み重ねの結果が、今回のバドベルレブルグの合同役員会となったのです。

国連各諸機関、各国政府・民間の国際団体、また盲人団体からも、厳しい批判や熱烈な要望が両団体役員に手紙や口頭で注文づけられました。先ずその1つは、「同目的を持つ2つの団体がこの地球上に存在し、それが国連または各国政府に同じ内容の要望が相異なった団体から寄せられ、しかも互いに相手を良く言わないという

状態では、誰れが盲人に援助し協力をしようという気持になれるのか」といった事と、今1つは「末端の盲人達は、盲人団体に加盟する場合、世盲連側がよいのか世盲協側がよいのかわからず、個々の盲人でさえ、彼は世盲連側だ彼女は世盲協側だと深刻な争いがあり、こうした事では盲人の教育や福祉が後退して行くのみである」でありました。

以上のような経過と、この厳しい状況下に対応するため、世盲協側からは会長のボリス・ジミン氏(ソ連)、副会長のドリナ・ノウィル夫人(ブラジル)、アブダラ・アルガニム氏（サウジアラビア)、岩橋英行（日本)、事務局長のアンダース・アーナー氏(スウェーデン)、会計のジョン・コリガン氏(英国)、前々会長のエリック・ボルター氏（英国—病気のため欠席）と、世盲連側からは会長のファティマ・シャー博士(パキスタン)、副会長のトム・パーカー氏(英国)、事務局長のレオナルド・ウルフ氏(ベルギー)、会計のフランツ・ゾンターク博士（西ドイツ）が参加して、この合同役員会とあいなったわけであります。各々の団体は、同じ保養所に仲良く寝起きを共にし、合同役員会前に各団体でどのように対応するか、1日半にわたって協議を重ねました。その結果、先ず両団体から2名の代表を出して準備合同会議を持ちましたが、結局、世盲協の定款を改正して、盲人団体から選ばれた代表を役員総数の50%以上入れ、会長、事務局長、会計は盲人でなければならないという事を記載しなければ、一本化は不可能であるという事が判明しました。そして今1つ、昭和53年5月に開かれた大阪役員会において決められた方式に従い、同年7月ロンドンにおいて世盲協2名・世盲連2名・仲介者1名になるバドベルレブルグ合同役員会準備会がもたれましたが、その時に起草された勧告文、更にスカンジナビア5ヶ国において決議された決議文が討議の要となりました。

合同役員会は、緊張と友愛の中に2日間朝から夜遅くまで続きましたが、時には一触即発、決裂寸前のところまで行きましたが、互いに理性と知性が暴走をおさえ、両総会宛決議文が作られました。この決議文は、時を同じくして持つ来たるべき8月のアフリカ総会に提出し、各々の総会がこの決議文を了承するならば、1984年までに3名づつの委員を出し、計6名が作業委員となって定款改正、合同総会を持つ準備を行うという事に相互に確認が交されました。この話し合いが終わった時、参加者達は上気した顔を笑顔に変えて互いに握手し、特に調印には調印式といったセレモニーまで行いました。

長い長い時間をかけ、“世界の盲人達のために”という1つの旗印の下に、やっと歩み寄れたというその瞬間は、誠に感激的なものであり、しんしんとして吹雪く

風雪の音は、あたかも今迄の相克を表わし、暖房の部屋は吹雪の中からやっと暖をとれたという旅人の喜こびにも似たものでありました。

(2) 調印文

世盲連と世盲協の役員会は、1979年2月27日と28日、パドベルレブルグに於いて開催され、1979年に開かれる両団体の総会に対して次のような決議を採択するよう勧告するものである。

本総会は、多くの国々において盲人のおかれている情況を改善するために盲人援護団体の活動が非常に価値のあるものであった事を認識する。

また盲人を教育し訓練して有益な独立した市民とするために個人、団体によって成されて来たその先駆的な貢献を感謝するものである。

また個人的に民間レベルにおいて盲人達がそれぞれの情況について目を開き独立した有力な盲人団体の設立に至らしめた歴史的な発展というものをも認めるものである。

この総会は更に盲人団体及び盲人援護団体が国際的に知識や経験を交換するための場を必要としているという事も認めるものである。

この総会は現在なお世界のある地域においては将来性のある盲人団体の設立というものが極めて困難であり、こうした場合には盲人援護団体による盲人福祉活動というものが続けられ、また一層強化されなければならないという事をも認識する。

総会は、世界のあらゆる場所において責任ある盲人団体の設立という事に対して努力が行われ、全ての盲人援護団体が、このような団体の発展を促進するために協力を行い、また盲人援護団体内部においてもその運営にあたり、盲人の参加を認めるという方向に進まなければならないと固く信ずるものである。

総会は殆どの国々において、現在盲人自身が彼等の生活向上のための各種問題の解決において有効にそれに参加する事が出来る段階に達していると確信する。

こうした現状において盲人団体と盲人援護団体の間に今一つ協力体制が充分でない国があるという事を遺憾に思うものである。

盲人援護団体が余りにも強力であり、盲人団体が設立され得なかったり、あるいは存在しても充分に活躍する事が出来ないような状況も見受けられる。そこであらゆる段階において恒久的なまた有効な相互関係というものが両者の間に培われ、両

団体共に互いに益となりまた相互依存という形を保存する事が必要であると強く信ずるものである。

そこで本総会は、こうした結果が誤解、困惑、あるいは努力の重複といったものが国際的にあるいは地域的に生まれ、限られた資源を分散するという望ましくない種々の問題を生んだという事実をここに宣言する。

これらの問題を除くために、本総会は1984年に世盲協と世盲連の合同総会を開き、その場において新らしい団体の設立というものが盲人団体、盲人援護団体両者の利益を求める目的でもって討議される事を同意するものである。

その主な目的の1つは全ての国において盲人達が直接関係のある事業の運営あるいはその政策の決定等に充分に参加する機会を与えられるような円熟した責任あるまた独立した盲人を育てる場を作り出すという事である。

この新しい団体は、少くとも各国代表の半分は各々の国の盲人団体から指名されねばならないという事を条件に設立されるものである。

このような目的を追求するために、本総会は次のような勧告を行う。

1. 1979年に開催される両団体の総会は、1984年に世盲連、世盲協合同による総会を開く事に同意する事。
2. 1979年度の総会において両団体の賛成によって選ばれた委員長のもとにそれぞれ3名づつの代表を出して合同研究グループを設立する事。

   この研究グループは、1981年に同時に開かれるそれぞれの実行委員会に次のようなものを提出しなければならない。

   A. 1984年度総会のプログラム草案。

   B. もし新しい団体の設立という案が1979年の2つの総会によって認められた場合には、こうした将来の相互関係に関する提案、特に新しい団体の定款についての提案の草案。

   C. 合同事務局の設立の可能性、及びその設立可能な時期等についての研究。
3. 世盲連、世盲協の役員会は、1984年までに全世界的なレベルで何回か合同会議を持ちその活動、行事等についての計画をたてる。
4. 地域委員会のある地域においては、その地域の役員は、1984年迄に合同会議を開く事を勧告する。

   こうした地域的な合同役員会は、その地域における合同総会やまたその他の活動、行事等を合同を行う事についての計画作成にあたり、その指導を行う事を目的とする。

5. 各国においては、それが受入れられるような状態であれば、国内的な調整委員会を設置し、世盲連・世盲協両サイドからの代表を出して1984年世盲協総会に対しては、盲人団体の代表をも含めるような方向に向かって意見を確立するよう努力する事。
6. 世盲連と世盲協のあらゆるレベルにおいて話し合いがより一層強化される事。また、どちらかの団体で何らかの行事、活動、キャンペーン等を行う場合には他方に対してそれについての通達を行い、もしそれを妥当と認める場合には合同でそれを行い得るよう努力する事。

1979年2月28日

バドベルレブルグにて
世界盲人連盟
世界盲人福祉協議会

(3) バドベルレブルグにひろう

会議の最中、興奮しきった頭を冷やすために、各国代表は知恵をしぼって休養を取っていました。ある人は雪山に登ったり、街に買物に出たり、ベッドにひっくりかえったりしていましたが、私は温水プールで泳ぐ事にしました。長さ25m、巾10mのプールで、ガソリンで沸かした温水プールです。室内は約25℃前後に保たれ、シャワールームは手を前に出すと湯や水が出るようになっています。1人で泳いでいると、失明軍人が奥さんと一緒に入って来ました。両眼失明し、両上腕から切断されて義手となっています。奥さんは晴眼者ですが、仲良く入って来て泳ぎ出しました。切断された両腕にゴム状の貝のようなものを装填し、先ず夫人が声を出しながら先を泳ぎ出します。彼はそのゴム製の手で器用にクロールで夫人の後を泳いでいます。彼女がもぐると彼ももぐります。私は一瞬唖然、として、この2人の行動を耳で捉えようとしました。とにかく天真爛漫と言おうか、障害に対する抵抗もなければ、障害ゆえに泳げないという不安とてなく、全くごくありふれた夫婦がプールで戯れているという姿を想像していただきたいのです。もし私に両手がなければ、あんなに器用にもぐったり、泳いだり、鬼ごっこのような事が出来るのであろうかと考えてみました。上には上があるものだなあ、人間が1つ2つと各々の機能が犯され喪失していっても、工夫と心の持ち方次第では、どのような可能性へも挑戦出

来るという実証を目のあたりに見せつけられ、頭の下がる思いが致しました。

1日目の合同役員会が終わり、もはや決裂かという悲壮にして忙しい気持が、各々の代表の頭の中にこびりついていました。食事中も誰れ1人としてしゃべる者もなく、食事後バーに行って、むっつりした顔で苦いウィスキーを飲んでいました。しゃべると険のある発言になり、言い合いになるのはわかっているが故に沈黙が部屋を支配しました。そうした時、会計のコリガン氏が英国紳士らしく入って来て、ウィスキーのグラスを片手に律儀そのものの顔をして「諸君、誠にご静粛で結構な事です。この静粛さにプラスして、非常に有益なお話しを聞かせましょう」と言いました。彼の話術は、常にユーモアと比喩の間を往復し、どこまでが冗談で、どこからがまじめな話かわからないという、英国人独特の皮肉屋さんであります。何を言うのかと皆は耳をすましました。「ある中年の紳士が、コールガールの置屋に電話をしました。"もしもし一番痩せた若い女の子をすぐよこしていただけませんか"と言いました。そこで置屋の主人は"貴方のような由緒あるお宅に、コールガールをお呼びになってもよろしいのですか。奥さまはご存知ですか"と怪訝な声でたずねました。彼はむっつりした声で"君には関係のない事だ。すぐよこしたまえ"と受話器をおきました。指定された時間に、非常に痩せ細ったガリガリの女の子がやって来ました。主人は自分の部屋に彼女を案内しました。女の子に向かって"服を脱いで下さい。下着もとって下さい。取ったら床に四つん這いになって下さい"と命じました。言われるままに女の子は下着をとって床の上に四つん這いになりました。彼はドアの方につかつかと歩いて行ってドアを開け、口笛を吹きました。すると大きなセントバーナード犬が部屋に入って来ました。彼はその愛犬に向かって"お前はこの頃気ままで食事をとらないが、ちゃんと食べなければ、見てごらんこんなにガリガリになってしまうよ"と言いました。」真面目くさって思わせぶりたっぷりにこの話をしたもんですから、固唾をのんで聞いていた連中は、終わるやいなやどっと笑いこけました。一時はどこまで落ちるのかと思った人もあるでしょうし、特にご婦人達は、私の耳元で席をかえた方がいいのかどうだろうかと耳うちをしたほどです。こうしたユーモラスさと機知に富んだ行為は、小半時各自の心をなごませ、各々お国自慢の小話を順番にする事になりました。緊張し切った空気が、英国独特の名人の手によって、一点和気あいあいの世界に誘い込んだというよりも、誘い込まれた一例です。

猛吹雪の夕食後、近くのお城に我々代表はカクテルパーティーに招待されました。ここの王女さまと言っても既に70才近い方ですが、私達の労をねぎらって下さると

いう事です。こちこちに凍った雪の上を歩くには非常に骨が折れます。バスがお城に着くと、100m程歩かねばなりません。2・3人の人がすべってころんでいます。お城は16世紀頃に建てられた石造りの建物です。長い長い階段を登ってレセプションルームに着きました。執事らしい人が古色蒼然という、いかめしくも古い服装でドアの両脇に無表情で立っています。部屋の中には薪がマントルピースの中で勢いよくパチパチと燃えています。部屋の大きさは150～200畳敷ぐらいの広さです。天井からは素晴らしいシャンデリアが下がり、四方の壁には装飾をこらしたろうそく立てに、何百本というろうそくがユラユラと動いています。外は吹雪、タイムカプセルの中に入って何百年もさかのぼってしまったような錯角にとらわれました。何頭だてかの馬車が雲の彼方からやって来て、そこから王女さまが王子に手を引かれながら入って来るのではないかと思いました。風の音が優雅なダンスの音楽にさえ聞こえて来ます。王女さまがスウェーデン語とドイツ語と英語で挨拶をされました。従兄弟か又従兄弟かの方がスウェーデン国王だという事です。結構なワインを頂き、椅子に座ってポツネンとしていると、横のティーテーブルの上に、直径10cm位の小さな皿が置かれていました。その皿をひねくり廻していると、誰れかがやって来て、この皿が気に入られましたかとたずねるのです。説明を聞くと由緒ある皿で、中には美しい花模様が描かれていました。この皿には、王女さまがあの指輪をはずして置かれたらよく似合います。私は何となく、その皿がこよなく高価なもので、王女さまにとっては、このお城よりも大切なものではないかと思いました。帰途、何とかあれに似た皿を手に入れたいとフランクフルトであちらこちらを探しましたが、なかなか見当たらず、やっと一軒の店にそれを見つけ、記念として買い求めました。幻想と空想を折りまぜ、このおとぎのお城をスケッチしてみました。

(昭和54年10月2日 記)

(4) 新たなる挑戦

アントワープのホテルに1日早く着きました。ゆっくり旅の疲れを癒そうと思っていましたら、アーナー事務局長がやって来て、大変な事になったと申します。この総会直前まで同じこのホテルで世盲連（IFB）の総会が開かれていました（参加国40ヶ国、出席者160名）。そこで、今年3月パドベルレプルグにて両団体の合同役員会において決議されたあの画期的な調印文は、否決されたという事です。長年かかってやって来た努力も無駄になってしまったとがっかりしています。その夜8時

から世盲協の緊急役員会が開かれました。世盲連の副会長でもあるサウジアラビアのアルガニム氏が興奮して着席しました。彼は何かに憑かれたような語調で発言しはじめましたが、こちらからうまく組織だった質問をしないかぎり、つぎはぎだらけの学生論文のようになってしまいます。要約すると次のようになります。―イスラエル出身の某アメリカ人が、アジア・アフリカ・ラテンアメリカの盲人達を扇動し、アルガニム氏が両団体の仲裁に努力した事を、世盲連を世盲協に売りつけたけしからん人物と公言したそうであります。世界の情勢にうとい盲人達（特に開発途上国）は、これを鵜呑みにして、アルガニム氏はだめだという事にあいなり、世盲協と世盲連の次元高い統合という理想はどこかへ置き去られ、ただ感情的に否決らしきものが行われた―という事です。世界観のない無知な人間ほどデマにまどわされ、無知なるが故に感情的となり収拾がとれなくなる。それが残念ながら盲人であり、そう批判する自分もまた盲人であるという事が、世盲連総会に参加した人々の声のようでありました。しかし、外部に対する世盲連側の言い分は、未だ盲人団体（of the blind）が結成されていない国が多数ある事、いまひとつは、盲人は晴眼者を抜きにして、盲人だけで激論を戦わし、言いたい事を言える場所がほしい、それは世盲連以外にはない、こういう２つの理由から統合には反対する、ただし世盲協との協力は惜しむものではない、よってこうした結果が生まれたという事です。いずれが正しく、いずれが建前であり本音であるのかよくわかりませんが、とにかく種々の込み入った事情により、バドベルレブルグの調印文がすんなりと通過しなかった事は事実であります。その夜、午前１時まで、世盲協としての対応策が協議されました。

この報告を聞きながら、私はアルガニム氏が世盲連を世盲協に売って統合をはかったという問題については事実無根であり、毛頭そうした気持も彼にない事はわかっていますが、その他の理由については、痛いほどよく理解出来るような気がいたします。前述のバドベルレブルグの報告にも書きましたが、1964年のニューヨーク総会以来、盲人の晴眼者に対する不信感と、そこから派生する攻撃的な活動が表面化してきました。暗闇の中に閉じこめられ、自らの一生を精一杯生きて行こうと決意する盲人が社会から受けた多くの打撃や中傷、また無理解、晴眼者のご都合主義など、その原因には枚挙のいとまもない程です。

こうした盲人達が、外界との接触を断って、盲人だけで何らの遠慮や屈託もなく、誰れをはばかる事もなく発言が出来、お互いに語り合う事によってうっ憤を晴らし、相互の経験をぶちまけ合う事によって、勇気づけ合い理解する場所も理屈抜きで必

要かと思われます。しかし相互に理解し合えたとはいえ、それは問題の解決に何ら建設的な意味を持たない事も事実でありましょう。ましてこの世界がほとんど晴眼者によってつくられ、その中に住まねばならない盲人達にとっては、ここに生活しようとする限り、いかに理由があろうともこれに対応する姿勢と社会との協力、更に社会に埋もれたリソースの堀り起こし、堀り起こされたリソースの活用こそが必要でありましょう。とは言え、例えばアイボリーコーストの代表が述べていた如く、ここ1世紀の間に盲学校を出た盲人はただの1人しかいない。全ての盲人は全くの無学文盲なのであるという事実も見逃がすわけにはまいりません。無学文盲、その結果が誰れを信ずるかと言えば、真に盲の理解者である盲人以外にはありますまい。こうした事を思う時、欧州や日本を含めた先進諸国の恵まれた盲人達にとっては、パドベルレブルグの調印文は正に次元高い理想かもしれませんが、そうでない盲人達にとっては、これを承認する事は非常な冒険であり、越えてはならない一線（晴眼者との妥協）を越える事になります。

世盲協の役員会は、世盲連の今回の処置に決して軽蔑や不満を抱くものではなく、むしろ逆に心痛む思いで理解を致しました。私達は世界の個々の盲人のために、長い時間をかけても、特に開発途上国の教育・福祉の定着に、より円満な知性が、客観的な判断が、今より以上に出来得るまで待つとともに、より積極的にそうした次元へ到達するためへの準備と設備投資をやらねばならないと考えました。よって世盲協の役員会としては、常に窓を開き、いつ呼びかけがあってもそれに応え得る体制を作っておく事、統合は出来なくても常に協力という橋はかけておく事という2点を再確認し、役員会としての態度を実行委員会にはかり、実行委員会の名において総会に持ち込むという事になりました。実行委員会においては概ねこれを了承しました。しかし中には、今さら別に協力をしなくてもよいではないかという意見もありましたが、総会において長い長い理性的な討議の末、結局別記にあるごとく示された結論（本総会決議①、⑫）を得たのです。その結果、総会終了後に新役員による世盲連との合同役員会において、両団体より3名の代表を出し、いかにして協力体制を作りうるかの基盤固めをすると共に、委員長を第三者に依頼するという決議がなされました。国連の事務総長に依頼してはという話も出ましたが、結局国連の中で盲を理解し、国際法に熟達し、客観的な判断が出来得る円満な人という事で、両団体の事務局から国連に依頼する事になりました。世盲協の実行委員会としては、問題が重大であるため、アメリカ・ソ連・英国がこれにあたり、盲目の弁護士オーラル・ミラー氏（米国）、前会長ボリス・ジミン氏（ソ連）、前々会長エリック・ボ

ルター氏（英国）がこの任務を担当する事になりました。なお国連より派遣してもらう委員長には、ILOで活躍され現在ＥＥＣの役員であるルクセンブルグのアーサー・ベネット氏が有力候補となっています。

3．第６回世界盲人福祉協議会総会より　――アントワープにて――

(1) 開発途上国の課題

政治・経済・軍備等の国際問題の中においては、よく東西問題と開発途上国の問題が話題にのぼります。幸いにも私達世盲協の中にあっては、国境・人種・イデオロギーを超えて、盲人のためにという錦の御旗がありますので、東西問題についてはトラブルはありません。しかし開発途上国の問題については、あまりにも隔たりすぎたこの開発途上国と先進国の間の溝を、いかにして埋めるかという課題が、世盲連との関係以上に深刻に討議されました。

最初にも書きましたごとく、この格差を埋める目的のために、ナイジェリアで総会を持とうとしたのですが、不幸にも実現しなかったわけです。それにもかかわらず、実に多くのアフリカ大陸からの参加者がありました(17ヶ国、31名)。この多くの代表から聞かされた実情は、まさに目をおおうものがあります。それは農村問題、失明防止、教育、リハビリテーション、職業、盲人用具、開発途上国への援助といった各チャンネルから浮きぼりにされてまいりました。しかし一貫して言える事は、広大なアフリカ地区、膨大な盲人人口を擁するアジア地区、そしてラテンアメリカ地区において、中でもアフリカ地区より最も要望された事は、“盲人に人間らしい生活を！”という事でありました。人間とは、どのように定義づけられるかは、各々の時代・文化等によって異なりはしましょうが、しかしここでは次のように望んでいるようです。「最低限必要な衣食住を満たされ、最低限の文化的恩恵にあずかれること」と言えるようです。今、開発途上国においては、１分間に６人の人が餓死または戦禍によって死亡しているといわれています。そうした中に最も比率の多い死亡者は、行動力を奪われた盲人だという事です。地中海に面したチュニジアや、高度な伝統と文明を有するエチオピア、その他数ヶ国を除いては殆どの国に盲学校らしきものはありません。ただミッション系の盲学校やリハビリテーションセンターが存在してはいますが、これとてもおびただしい天文学的な数の盲人を対象として

は、焼け石に水の感があります。前述のごとく、アイボリー・コーストでは今世紀において盲学校を出た学生は１人のみとか、全てが無学文盲のままに放置されています。しかもその生活は先進国におけるペット以下だと言っても言いすぎではないようです。

更に、失明者の増加率という点では、手のつけられない状態でオンコセルカイアシス（リバープライド・発盲糸状虫症）の猛烈な蔓延が、アフリカの人々を恐怖のどん底に落し入れています。ヒラリヤ寄生虫の一種（発盲糸状虫）で、ハエが媒体となり、この寄生虫が付着した食べものを食すると、ほとんどが失明すると言われています。特に最もひどい地域はサバンナ・デ・アパデルタ地区であり、全村全員が盲人というところも少くないそうです。因みに日本の失明者の出現率は10万人に対し約260～270人という事です。しかしＷＨＯの推定では、この地帯は10万人に対し８千人～１万３千人とも言われています。更に目をアジアに向けてみますと、たとえばインドにおいて就学適令対象児は１千９百万人ですが、その約半数がビタミンＡ欠乏症、角膜軟化症により失明のおそれありという事で、インドネシア、バングラデシュ、ネパール等もこれに似た状態であります。

さて、こうした失明のおそれのあるもの、または治療可能な患者に対して眼科医がどれほど用意されているかをＷＨＯの統計によりみてみますと、日本は人口比率からいうと２万人に対し眼科医１人、フィリピンは10万人に１人、インドは17万人に１人、中国は20万人に１人、インドネシアは100万人に１人バングラデシュは150万人に１人、ネパールは300万人に１人、となっていますが、アフリカ大陸においては治療を待っている患者がわかっているだけでも300万人いるといいますが、それに対応出来る眼科医は、アフリカ全土で300人しかいないという現状であります。

こうした状況から推理してまいりますと、近く世界の盲人総人口は４千万人に達し、しかも先進国の盲人に対する教育・リハビリテーション・職業問題が、科学的な方法において処理されているのに反し、開発途上国はますますたち遅れ、放置されたままで、開発途上国と先進国の格差は開く一方だという事であります。よって何から手をつけるかという課題でありますが、アフリカ選出の国連代表は、清潔な水、衛生・栄養・教育の順にその対策を訴えました。清潔な水だけを取り上げても、完備された水源地と上水設備が必要であり、衛生面にいたっては下水口の付設にはじまり、各家に便所、各村や町に保健所の設置が必要であり、栄養面では何よりも母親の栄養知識の普及から開始されなければなりません。しかしこうした事どもはあまりにも厖大な費用と年月を要します。世盲協の力では到底背負いきれるもので

はありません。参加国の人々はただその悲惨さに啞然とするのみでありましたが、とは言え放置する事も出来ず、こうした事こそ先進国首脳会議や国連理事会において、ただ、盲という範ちゅうでとらえるのではなく、人類社会の危機という形において取り上げてもらうよう働きかける事の必要性が痛切に叫ばれました。中でも各国からアメリカ・ソ連・日本・西ドイツという順番で、わざわざ国名を指名して、こうした課題と真剣に取り組むよう、参加65ヶ国から厳しくもかつ熱烈なる要望がなされました。

さて世盲協として具体的に取り上げうる道は、失明防止と教育・リハビリテーションの面であり、特にアフリカに近いヨーロッパ地区、アジアに位置する日本と隣接地域であるオセアニア地区、ラテンアメリカに対してはアメリカ・カナダに、当然その具体的な解決の責任がある事が各国代表より明示されました。アメリカやソ連・日本・ヨーロッパ諸国からコンピューターを利用した高度な盲人への科学的対応が発表されると、その素晴らしい発展ぶりに脅威の目は向けられたものの、逆にそれだけの余力と財力があれば、何故開発途上国への援助をしないのかという反感と思われるものさえも見られたほどであります。今までの総会が、先進各国の科学的進歩と発展の状況を報告し合い、その優劣に興奮したのに対し、今回の総会は、そうした進歩の発表はむしろ色あせ、開発途上国への援助と、どの国でどのような救済計画が出来るかという事こそが大切であるというように変化したのも、今回の総会の顕著な特徴でありましょう。

アメリカ・ソ連・日本・西ドイツ・世界開発銀行・ＥＣ・先進国首脳会議という固有名詞は、ことあるごとに各国代表の発言の中に見られ、しかもそれが開発途上国に対し何をしてくれるのかという、厳しい怒りの声かと思われるほどの救済要請となっていた事を、特にこれを読まれる政府関係・財界関係の方々に知っていただきたいと思います。なお日本にとっては、今やアメリカに次ぐ工業生産能力を持ち、経済大国となった今日において、ただ自国のみについて考える時代は過ぎ去り、世界に対する責任ある発言と、中立的な救済援助が、当然の義務として厳しい監視の中に登場して来た事を自覚せねばなりません。開発途上国の人々ははっきり申しました。「開発途上国の問題の解決なくして、先進国だけの栄耀栄華の時代は終わった」という事でありました。

(2) 盲人の行動訓練

1964年の第3回ニューヨーク総会の人間宣言以来、盲人の単独歩行については、其西南北を問わず非常な関心が寄せられるようになりました。今日、盲人の単独歩行を可能にするためには2つの方法があります。白杖によるものと盲導犬によるものです。

これらを容易ならしめるために、補助具として超音波メガネ（Sonicguide）が併用されています。白杖による単独歩行の技術は、第二次世界大戦中、米国のペンシルベニア州のバレーフォージ病院にて、失明傷痍軍人の治療にあたっていたリチャード・フーバー博士によって発案されました。よってこの技術をフーバーケーン・テクニック（Foover Cane Technique）またはロングケーン・テクニックと呼び、総称してペリパトロジー（Peripatology）又はオリエンテーション・アンド・モビリティー（Orientation and Mobility 歩行訓練以下O＆Mという）といいます。

白杖が、盲人にとってなくてはならない補装具となったのは、1930年米国のイリノイ州の州の法律の中に取り入れられ、国際ライオンズクラブのカナダにおける世界大会（1931年）において公認されています。盲導犬は、1861年ドイツで軍用犬を改良して開発されました。我が国には、昭和13年にはじめて輸入されています。また“こうもりの原理”を応用したもので、超音波を発しエコーによって返ってきた音を選別することにより、相対する障害物の材質、広がり、大きさを知る超音波メガネが生まれました。これは1960年頃、ニュージーランドのカンタベリィ大学のケイ博士による研究からはじまり、1970年頃にワーマルド・ビジランド社（アメリカ）で完成されました。盲人の単独歩行には、その他種々の補装具がありますが、例えば同じニュージーランドで開発されたモワット・センサー（Mowat Sensor）、アメリカやスウェーデンで作られているレーザー・ケーン（Laser Cane）、またソ連の視覚欠陥学研究所で開発された胸から下げる超音波触知器等々があります。

1964年までは、欧州・アメリカ等において最も利用度の高かったのは盲導犬でありましたが、この頃を契機にしてO＆Mが、急速ないきおいで世界各国に拡まってゆきました。人間が生まれてから先ず最初にしなければならない動作には、母乳を飲むこと、次いでハイハイから壁づたいに歩く事であります。歩行という事は食べることと同様、人間の最も基礎的な行動でありますが、失明という挫折は、この歩行という課題を根底からくつがえし、人間の行動を一切否定致します。とにもかくにも中途失明者が社会に再復帰するためには、この歩行、もっと大きく言えば、行動を容易にすることから始められなければなりません。それは盲人自身に、自覚と自信と勇気を与え、自らの行動の限界を知り、社会への対応の精神的な自覚を促す

基礎にもなります。とは言え、開発途上国に住む盲人、交通戦争の激しい大都会の盲人、山野・奥深い密林または茫漠たる海岸に住む盲人等々、種々ありますが、とにかくその土地において最も適切な材料で杖を作り、自らの望むところに、あらかじめ教えられた基礎的な歩行技術を利用して目的地に安全かつ能率的に到達する事が歩行訓練の原則とされています。

今、アジアには1千5百万人近い盲人がいるようですが、こうした人々を対象として、歩行訓練士は、このアジア全地区にわずか200名程しかおりません。そのうち100余名が日本、あとの100名が全アジア地区におります。アメリカにおいては、歩行訓練指導員は大学院の修士コースを経て、マスター・オブ・アーツの資格が与えられていますが、アジアの場合、日本においては厚生省の委託で、日本ライトハウスにて約4ヶ月間の講習のあと、修了証書が授与されています。他の国にあっては、特殊な場合、アメリカ・オーストラリア・イギリス等に留学してその技術をマスターしますが、あとは短期間の講習会か、または見よう見まねでたたき上げた歩行訓練士がいるだけであります。ましてアフリカ・ラテンアメリカ等においては、歩行訓練士という名前さえも知らない国々の多いことを知らねばなりません。盲人が教育を受け、職業や家庭を持つためにも、点字の習得よりも先にしなければならない事、それが単独歩行といわれています。かかる歩行をマスターした盲人達は、先進国にあっては盲導犬を持つ事が出来ますが、開発途上国にあっては不可能な事であります。確かに白杖を使っての歩行は孤独ですが、盲導犬の場合は、ものこそ言いませんが良き伴侶であり、孤独からの開放には最も適した方法といえるでしょう。

総会開催中、白杖を使っての歩行訓練の成果が、いやがうえにも実証された良き例として、ガテマラの地震があげられました。国土の80%近くを災害にみまわれたガテマラにおいては、多くの罹災者が出ました。もちろん盲人もその中に含まれていました。日本を除く先進諸国の盲人団体・施設から膨大な寄付が寄せられ、かつサウジアラビアからもラテンアメリカ盲人のために、救済物資や義援金が送られたことが報告されましたが、電気・水道・ガスが突如として使用不能になった暗闇の中で、お互いに連絡をとり合うことが困難であり、特に救済命令や救援依頼の緊急を要する連絡を、どのようにして行うかが非常に大きな問題でありました。この時に歩行訓練をマスターした若い盲青年達が、あちらこちらの緊急連絡や物資運搬の道案内として活躍したという事であります。歩行訓練は、単に盲人自身の自立のために役立つのみならず、こうした緊急の場合にも活用出来るという事が実証された

のです。

昨年12月の第5回アジア盲人福祉会議（於香港）においても言われましたが、歩行訓練の技術を個々の盲人に徹底させるためには、盲人団体の長・施設長・盲学校長（盲人の場合）が、自ら単独歩行をしなければ、その完成はあり得ないと、再度この総会で大きく叫ばれたのも意義深いものでありました。「おえらさん方は、ひとりで歩け、ひとりで歩けと口やかましく私達に言いますが、そう言う人ほど介添えを連れて歩いている例が多いのです。あれでは歩行訓練は普及しませんよ」とはにかみながら話してくれた若い盲青年の言葉には、耳をかたむけさせられるものがありました。

(3) 盲人のスポーツ

1977年サウジアラビアのリヤドにおいて開かれた実行委員会において、世盲協の中にスポーツ委員会を新たに設置することが決議されました。最初の委員長には東ドイツのヘルムト・ピーラッシュ博士が就任しました。

1964年以来、有能なる社会人として一般社会に盲人が活躍する場合、そのパスポートとなるものはリクリエーションとスポーツであると言われています。もちろん個々の盲人の趣味・娯楽・体位向上のために必要ではありますが、晴眼者と盲人が互いに意識することなく、スムーズに楽しみながら融合出来るものは、この2つをおいて他にはありません。しかもそれは盲人だけのリクリエーション、盲人独特のスポーツを強調するのではなく、晴眼者達が持つリクリエーションやスポーツに、盲人がどのように対応し参加出来るかという事が、大きく叫ばれてまいりました。スウェーデンにおいては盲人団体が単独でリクリエーションやスポーツ活動をするのではなく、必らずその都市、その町・村の晴眼者達と共に参加し合う事が、スウェーデン盲人協会の基本的な運動方針とされてきました。1972年、各盲人協会分会で社会人参加のもと合同で行われたその回数は、実に年間2600回におよんでいます。

今1つ先進国における当初の盲人団体の運動目的は、盲人のニードを社会に訴え、国や地方公共団体から予算を獲得し、法律を完備する事でありました。しかし法の完備、補助金の充実等により、その必要性が除々になくなってきた時、周囲を見わたせば色々な面で晴眼者との間に溝が出来、歯車のかみ合わない大小様々の事態が発生している事に気がつきました。それと共に、盲人自身の中に権利を主張し、要望することのベテラン戦士が多くあっても、社会との交流を考える人々が少くなって

いた事に気づいた指導者達は、特にリクリエーションとスポーツに力を入れるようになりました。「盲人は盲人だけでかたまってはならない。盲人は勇敢に社会に進出すべきである」とは盲目の逓信大臣ヘンリー・フォーセットの有名な言葉でありますが、この言葉達成への近道こそ、リクリエーションとスポーツにあると先進国の指導者達は考えました。こうした背景がもとで、世盲協はスポーツ委員会の設置を1977年に認めたわけであります。

身体障害者を全て網羅している国際身体障害者スポーツ協議会(ISOD)がありますが、先ずピーラッシュ氏はこの団体との友好的な連絡をはかることに力を入れました。その結果、両団体より同数の代表を出した技術委員会を組織し、そこで色々な問題を処理することになりました。また各地域委員会中にスポーツ委員会を設け、ISODと合同して出来る競技会に必らず世盲協からも参加すること等が、この総会までに準備されました。その結果、各種盲人に適したスポーツの種類がピックアップされました。中でも柔道、水泳、フェンシング等は重点競技種目として話題にのぼっておりました。総会にはわざわざISODの事務局長が出席、円満裡にISODと世盲協の人事交流が終了したので、今後は全ての身体障害者競技会に世盲協を招致する旨の発表がなされました。特に感銘深く聞いたのは、南ア連邦がアフリカにおいてもその他の地域においても、国際会議はむろん各種スポーツの競技会にあってもその参加を拒否されてまいりましたが、世盲協が人種を超え、政治的なもの一切を排除している建前から、南ア連邦を正式加盟国と認めているということです。よってISODの国際競技大会にも世盲協を通す限りにおいて、南ア連邦が参加する事を許可された事は、明かるいニュースでありました。また会議の席上、アメリカの盲人達は非常にゴルフとボーリングが得意である、またコロンビア、アルゼンチン等の代表からは優秀な盲人サッカーチームがある、英国の代表からは盲人のクリケット選手がいるからと次々に発言があり、我と思わん方々は対抗試合をしませんかとの誘いがありました。

(4) 盲婦人問題

1978年12月に行われた第5回アジア盲人福祉会議（於香港）で、盲婦人問題だけが特に取り上げられ、また決議の中に一項目を設けられました。今日までの25年間の世盲協国際会議をひも解いてみても、全て視力障害者という範ちゅうの中で、男女共に扱われてまいりました。しかし開発途上国にあっては、宗教上の理由と、い

ま一つは極端な男女の差別という原因により、男子の教育・福祉・職業開拓は進歩したとは言え、盲婦人の地位の向上、職域の開拓は、開発途上国の問題以上にたち遅れを見せているといわれています。その１・２の例をひろってみましょう。

アジア、中近東においては回教の国が多くあります。回教の戒律は、婦人が単独で外出する事を禁じています。ましてや盲婦人の場合はなおさらです。そのためほとんど年中、家の片隅に座り、家族からも社会からも盲婦人の存在さえ忘れられているのが現状であります。よって盲婦人の職業問題、ましてや結婚問題などは、とうてい想像も出来ない課題であり、婦人参政権などは論外であります。アフリカのウガンダその他にあっては、結婚の場合、男性側からニワトリ、ブタ、ウシ等を持って花嫁を買い求めに行くそうです（日本でいう結納のようなものだと思いますが、現地の人々はあえて妻を買いに行くと言いますので、その通りに書いておきます)。もちろん盲婦人などは、誰れも買い求めなかったようでありますが、ここに農業訓練センターが出来、盲婦人を収容して種まき、除草、脱穀、養鶏等の技術を教えると、早速に買い手がついたといいます。またアジア地区にあっては、盲婦人の仕事と言えば、売春もその１つであります。かつて「盲妹」という言葉がありましたが、売春婦に逃げられないようにする為と、客を選り好みしない為に、人為的に盲婦人が作られました。今でも香港あたりには、姿を見せない盲目の売春婦が多くいるそうです。

こうした事によって、今までの総会においても、何故盲婦人の問題だけを取り上げて討議しないのだという不平不満が、陰でささやかれていましたが、とうとう会議の最中、数名の婦人代表から緊急提案が成され、「貴方がたはほとんど男性であります。討議の中でも、よく一盲人でも昨今は晴眼婦人と結婚する事が容易になりました―と、不用意な発言がありますが、その逆に立場にあった発言は、ほとんど聞いたことがありません。いったい盲婦人の教育・結婚・職業について、今まで何を考えてくれたのですか！」と厳しいおしかりがありました。男性代表は、まさに粛として声もなく、ごもっともであるという意思表示をしたにすぎませんでした。会議期間中ちょうど中間あたりで、「手引きを含め、この総会に参加しているご婦人達は、晴盲を問わず全て別室に集合して下さい」というアナウンスがあり、会議場に残るは男性だけという、いまだかつてない珍現象さえ表われました。急きょ、決議委員会は、婦人問題を決議の一項に入れ、団体間協力促進委員会を排止して、盲婦人委員会を新たに設置することも致しました。こうした男性がたの大あわての緊急措置によって、一応おさまりはつきましたが、それが終わった時に、男性の中から

発言が求められました。「ご婦人の力の強さと恐さには、我々男子一同身にしみて感ずるものがあります。こういう状態であれば、益々ご婦人のお力は強くなるでしょうが、逆に男子の方は、益々小さくならざるを得ません。出来得れば次の総会の時に、男子の委員会を作っていただけないものでしょうか」という発言にどっと爆笑という一幕もありました。

新しい実行委員会において、盲婦人委員会をどのような名前のものにすべきか、また誰れを委員長にすべきかと、議論が沸騰いたしましたが、盲婦人の中から「男子の方々にはご遠慮願いたい。我々婦人で名前を決め新しい委員長を作ります。」という事で、盲婦人委員会の正式な名前は空白のままとなっております。昨年、イランにおいて第2回の世界盲婦人大会が開かれる予定になっていましたが、イランの政変により、おそらく来年マレーシアで開かれることでありましょう。この問題があって以後、インドとチェコスロバキアの代表と食事を共にした時、私は「戦後、日本では婦人の力とストッキングが一番強くなった。」と話しましたら、我々の国でもその通りだとニヤニヤと笑いながら返答がかえってまいりました。

(5) 失明防止

「開発途上国の課題」の項においても取り上げたように、開発途上国においては、オンコセルカイアシス、トラコーマ、栄養失調、ビタミンA欠乏症、角膜軟化症、白内障、外傷等により、視力障害者は日ごとに増加の一途をたどっています。しかし先進国においては、違った原因で失明者が増加しております。アメリカ眼科学会よりの報告によりますと、医学の発達により、男女共に高年令者が増え、ここ2～3年の間にその数はピークに達するであろうと言われています。しかしその中に老人性白内障、糖尿病等の原因で、老人中約80%が失明または失明のおそれありという事で、そうなれば盲老人に対するリハビリテーションの対応も出来なくなり、まして医学の力でこれを抑えることも出来ず、お手あげであると報告されました。更に工業・交通事故等により、壮年層の中途失明者の増加もあなどりがたい事実であります。開発途上国と先進国の失明要因は、原因こそ違え、まさにゆゆしき問題であり、過去数年前までは世界の盲人総人口は、2千万～2千5百万人と言われてきましたが、数年後には4千万人になろうとしています。その数はちょうどベルギーの総人口の4倍にあたります。

昨年8月笹川良一氏の勇気ある決断により、船舶振興会からWHOに対し、失明

防止のために20万ドルが寄贈されました。それが１つの呼び水となり、西ドイツ、アメリカ、北欧諸国等からも相当多額の寄付金が、失明防止を目的としてＷＨＯに集まったという事です。そこでＷＨＯでは、世界的な視野からいかに失明防止を実施するかというプランが、今年２月にジュネーブにおいて作られました。また西太平洋地区の失明防止についても、本年４月フィリピンにおいて第１回会議がもたれました。こうした経過をたどって、ＷＨＯは失明防止を重大項目の１つに挙げ、この対策に全力投球する事になりました。このような大きなきっかけを作られた笹川良一氏に対し、世盲協アジア委員会は感謝状を贈り、世盲協の失明防止委員会と世界失明防止協会(IAPB)は、感謝の言葉を総会を通しおくりました。また1969年のニューデリー総会決議により作られたアジア眼科医療協力会（会長、岩橋英行、日本ライトハウス内）の主たる活動は、同会常任理事の黒住格博士を通し、過去６年間にわたりネパール王国等に向けられました。その内容はアイキャンプ、眼科用機械器具の寄贈、眼鏡士・コンタクトレンズの研磨士等々の養成でありました。その結果、最初失明防止に目もくれなかったネパール政府が、最重点項目の１つに失明防止を取り上げたという事は、日本にとってもうれしい出来事の１つであります。

※以下は次号（第12号）に掲載いたします。

昭和55年６月25日　印刷
昭和55年６月30日　発行

発行者　岩橋英行
発行　社会福祉法人 日本ライトハウス
職業・生活訓練センター
大阪市鶴見区今津中２の４の37
印刷　大阪市天王寺区空清町７番地10
株式会社 深尾